

茶の湯文化学会会報 No.36

第36号 / 2003年3月15日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

湖州を訪ねて ― 第十七回研究会

高橋忠彦

茶の湯文化学会の研究会を海外で開催することは、かねてより計画されていたが、その最初の試みとして、中国の浙江省湖州市で第十七回研究会が、昨年の九月下旬に開かれた。計画に携わった者として、以下に報告を記す。

湖州市は太湖の南岸に位置する。昔は呉興とも呼ばれ、古典文学に縁が深く、同時に絹織物などの物産豊かな商業都市である。また、唐代に陸羽が居を定め、『茶経』を著した場所として、茶文化史上に名を知られている。現在は、湖州陸羽茶文化研究会が、ここを拠点とし、年刊誌『陸羽茶文化研究』を発行するなど、篤実な活動を続けている。今回の研究会は、董淑鐸湖州陸羽茶文化研究会会長の賛同を得て、同会と本学会の共同で開催することとしたものである。

海外を舞台とするため、本学会会員を中心に四泊五日の旅行団を組み、成田より十名、関西空港より十三名の二手に分かれて出発し、上海空港で合流した。(他に上海で二名、湖州で三名合流した。) 団長は倉澤会長、副団長は戸田副会長と高橋であり、小西理事も参加された。

九月二十五日には、成田からの飛行機が遅延したも

の、五時には上海で合流、直ちに湖州へ出発し、夜には宿とする湖州国際大酒店に到着することができた。ここで董淑鐸会長や朱乃良副会長らと会合を持ち、明日の研究会に備えた。

二十六日は、研究会の当日である。早朝八時に、会場となる湖州師範学院に出发した。師範学院のご厚意で、最新の設備が整った教室を会場に使わせていただいた。実のところ、中国での会場がどのようなものになるのか、不安があったが、コンピュータと連動した汎用のプロジェクターは、日本の大学でもめったにないものであり、スライドを用いた発表に効能を発揮した。

研究会は、董会長と倉澤会長の挨拶に始まり、日本と中国の茶文化を巡る多様なテーマの、八件の研究発表が行われた。午前中は、倉澤会長の「『茶道』考」、董会長の「陸羽の青塘別業の再建の意義」、高橋の「五山文学に見る日中茶文化の交流」、朱乃良副会長の「陸羽は如何にして儒士となったか」、大槻幹郎氏の「日本に於ける煎茶の始源に就いて」、午後には、蔡一平副会長の「茶と茶にあらざる『茶』」、顧雯氏の「『茶経』における茶の五官的な判断基準」、小谷寛

氏・曹建南氏・森村健一氏の「(財)小谷城郷土館蔵『茶づくり屏風』」が発表された。その後高橋と徐明生執行会長によるまとめの挨拶があり、八時半から四時に及ぶ研究会は無事に終了した。司会は徐氏と高橋が当たった。

研究会のあと、湖州国際大酒店に戻り、茶道の表演が行われた。中国側の表演として、湖州の慈雲寺の釈悟道監院らによる仏教色豊



かな茶道が演じられたが、正直なところ、茶をいれる手元の様子などが見えず、どのような特徴を持った喫茶法かは見定めがたかったが、基本的に葉茶と茶壺を用いた泡茶であった。余談であるが、湖州には、防風茶(青豆茶)と呼ばれる地方茶があり、以前訪れたときにいただいたことがある。それは、茶碗に茶葉と青豆と、蜜柑の皮などをいれて飲むものである。続いて日本側の表演として、北京大学外国語学院の孫曉艶さんと張毅さんが、日本茶道の表演を、解説を交えて行い、董会長も一服賞味された。

翌二十七日には、董会長、徐明生執行会長、張軒徳副秘書長のご案内により、湖州市近郊に点在する陸羽関連の遺跡を見学した。午前中には、市の西郊の妙峰山に在る三癸亭(顔真卿が陸羽のために建てたもの)と陸羽墓に向かった。車をおりて、竹細工を生業とする山村を抜け、山の斜面を登ると、茶経の石刻に囲まれた陸羽の墓、陸羽の親友であった釈皎然の墓などを経て、頂上の開けた所に三癸亭が建っている。現在の亭は、陸羽茶文化研究会が再建したものであるが、遠くに霞む太湖に向かって苜蓿の流が延びている景色を眺めることができ、かつて陸羽が小舟で行き

来たという往時をしのぶことができる。午後には太湖に沿って西北に向かい、唐代からの名茶の産地である顧渚山を訪ねた。陸羽も「顧渚山記」を書いて、その茶を評価したといわれ、今は『茶経』の言葉に因んだ顧渚紫笋茶が生産される。車を降りて竹林の間を進み、唐の貢茶園の跡といわれる吉祥寺、唐以来の名水金沙泉、顧渚紫笋の茶畑等を巡った。このあたりは、明代の名高い羅芥茶の産地でもあり、良質の緑茶が生産される環境を体感することができた。

二十八日に上海に戻り、夕食は天天旺の茶料理をもって名残の宴とし、翌日は無事に帰国の途についた。今回の研究会が無事に挙行



きたのは、ひとえに茶の湯文化学会と陸羽茶文化研究会の多くの方々のご協力によるものであり、海外なりの苦勞もあつたが、実りも多かったといえよう。今年の春には、湖州市内に陸羽の故居たる青塘別業も再建されるので、中国の茶文化に興味のある方は、湖州を訪れられることをおすすめしたい。

大会発表者募集

来年度の大会の発表者を募集します。今ところ総会・大会を五月三十一日(土)・六月一日に開催する予定で準備を進めています。発表を希望される方は、四月一五日までに、八〇〇字程度の概要を添えて事務局までお申し込みください。一発表二〇分質疑一〇分程度です。

例会

近畿例会

本年度第二回の例会を、一月九日午後二時半から八幡市の新しく開館した松花堂美術館で開催した。当日は開館記念の「松花堂昭乗と茶の湯の世界」展も開催中で、研究発表

も松花堂に関するもの。天気もよく、松花堂を堪能した一日であった。発表の要旨は次の通り。

「松花堂流」からみた「寛永の三筆」―三者の選定と伝統からの脱却について

川端 薫

松花堂昭乗(1584~1639)の書は、近世期を通じ「松花堂流(瀧本流)」として喧伝され、一流派として隆盛をみる。彼の書を評する際、しばしば用いられるのが「寛永の三筆」という呼称である。本発表では、この呼称が生ずる前提として、何故に三者(近衛信尹(1565~1614)、本阿弥光悦(1558~1637)、松花堂昭乗)が並び評され始めたのか、という点に注目する。

三者を並び評した早い例としては、元禄五年に刊行された『筆道秘伝鈔』内の「近代の能書といはむは、三藐院(注:信尹)、松花堂、光悦ならむ」という箇所があり、本書によれば、右は小塩幽照という人物の言葉であり、彼は松花堂の弟子・藤田友閑の高弟であるという。そこで、藤田友閑及びその息乗因の作成した「松花堂流」における筆道伝書の記述から、松花堂の筆道は、往古の能筆を

尊重しながら独自性を打出したことを確認する。更に、それが近衛信尹、本阿弥光悦にも通じる姿勢であったことに注目し、三者の共通点として、「青蓮院流」という伝統的書流からの脱却があつたことを考察する。

以上、「寛永の三筆」と評される三者の選定が「松花堂流」内に端を発することの背景には、師・松花堂を顕彰する思惑があつたと考えられ、これは新興の書流である「松花堂流」における展開として注目すべき事である。また筆道を通して、松花堂昭乗の諸芸術を窺うことも可能かと思われる。

松花堂の茶会記

谷端昭夫

昭乗の茶会記は寛永八、九、十年の三十会が知られている。これら茶会の道具として小堀遠州作茶杓「玉緒」や「遠州しがらき」などが使われているし、昭乗のもとには遠州好みの茶室があつたとされ、さらに遠州に掛物の表具を依頼した昭乗の手紙も残されていることなどからして、その茶は遠州に学んだのではないかと考えられてきた。

しかし、同時期の遠州と昭乗の茶会を比較すると、いくらかの相違点を見いだすことが

できる。その一つは昭乗の茶会が「書院」のみや、「小座敷から書院」へと場所を移動して会が行われる場合が大部分であり、小座敷のみで終了する会は見られないのに対して、遠州の茶会が「小座敷」のみで終始する場合が大部分であること。さらに遠州の茶会で使われる掛物の多くが墨跡であるのに対して昭乗の茶会には画賛を除くと墨跡は見られず、滝本坊の所蔵品目録たる「滝本坊代々什物之覚」などを見ても墨跡は一種しか登載されていない。場と掛物の使用法で遠州と昭乗の茶会では大きな相違が見られるのである。

東京例会

東京例会を十一月三十日(土)午後一時から東京芸術大学で開催した。要旨は次の通り。

五港開港前後の武夷茶とその品質—イギリスとの通商関係を中心に—

藤原敬士

本報告では、アヘン戦争の前後に中国から

主にイギリスに輸出されたBlack Teaの品質を取り扱った。当時Black Teaといわれた茶は主に福建省武夷山周辺で産したが、実際に武夷山中で作られていた茶は青茶(半発酵茶)の中でもかなり発酵度が低く、緑茶に類似したものであった。それらの茶がなぜBlack Teaと称されたかという原因については、第一に精製の段階で焦げた状態になった「黒色紅湯」の茶が武夷山の高級茶と混ざられて流通していたこと、第二に品質の劣化によって変色したものを「黒」と呼んでいたことを紹介した。このため当時のBlack Teaが完全発酵の紅茶であると断定することは尚早であると考えられる。また開港後のBlack Teaには発酵度の高い茶の製法が見られるが、それも地域によって様々であった。報告では輸出茶と中英貿易の関わりについても言及した。

信長茶会の政治的意図再考

田中秀隆

信長と茶湯をめぐっての研究に関しては、「名物狩り」、「御茶湯御政道」という観点から論じられることが多い。またこれらの視点に批判的な歴史家からも、信長政権

にとつての茶湯という形で、政治史と関連づけたいと研究として認められないような傾向があった。この発表では、織田信長自身も、茶会を主催した人物、すなわち亭主ととらえる視点で、信長の茶会をとらえなおしてみることにした。そのために、『信長公記』のエピソードから、文化的なパフォーマンスの主体となる一方で、従来の文化的教養を学びつつ、それから一步距離を置く信長というイメージを想定した。その信長イメージをもとに、『天王寺屋会記』に記す信長茶会を、二つの角度から分析した。茶会に出された道具の伝来の分析から、旧蔵者の征服・服従・講和・交代等メッセージを世間に流通させる媒体として茶会を利用した信長という点を指摘した。また、個別の道具を総合して、どのように茶会に呈示したかという観点からは、永祿年間に武将にはやったスタイルを基本におきつつ、茶壺の飾り方などで独自性を出す信長という点を指摘し、今後、信長を茶人としてとらえる視点が必要ではないかとの問題提起を行った。

お知らせ

浙江省の湖州市において、来る四月二〇日(土)・二一日(日)に、中国国際茶文化研究会主催で、「茶聖陸羽誕生一二七〇年記念会」が催されます。記念式典の外、再建された青塘別業の落成式、陸羽像の除幕式、陸羽の遺跡の見学、名茶の展示即売などの行事が予定されています。青塘別業は、陸羽が住んでいた建物の名で、湖州陸羽茶文化研究会の尽力により、湖州市の西北、苕溪のほとりに再建されたものです。参加費は人民元で三〇〇元だそうです。お問い合わせ及び資料請求は、メールで高橋忠彦まで

(fwik2332@nifty.com)。



上野尊楷に関する残された問題(承前)

毛利亮太郎

(3) 「三齋好み」ということ

この語は井上氏の著書に出ているが、それが何を意味するか不明である。そこでまず「細川井戸」を手掛かりとしてその内容を推察してみたい。

淡交社『原色茶道辞典』によると、細川井

戸は細川三齋所持によってこの名のある朝鮮茶碗で、「外部には深く轆轤目がめぐり、白茶地に薄青い釉なだれがあり、竹の節高台は片薄で土を見せる。カイラギは見事に付着し、内部は茶溜まりがなく、見込は少し尖状をなし、白釉は厚くかかっている。規模雄大で威風堂々たる井戸茶碗である」と注している。

着色写真が出ていて、一見軽く華いだ感じを帯び、むしろ黄味がかっており、よく見かけると高麗茶碗の佗びというよりは雅びを覚える。この茶碗は伊達政宗を経て松江の不昧公の手に渡ったという。

また、唐津焼の着色写真集である中央公論社の『日本の陶磁5唐津』の奥高麗茶碗、銘真藏院を見ると、その形が細川井戸によく似ているのに驚く。高台にカイラギはなく、轆轤目は浅く、色彩が少し暗いが、全体の色調と口縁の片寄りによく似ている。

茶碗「真藏院」の解説によると、この茶碗は松平不昧公所持のもので、箱の蓋裏に「真藏院」と墨書されており、真藏院は細川三齋の寺で、おそらく寺の什物であったのであろうという(一〇頁)。

茶碗真藏院が三齋所持のものであったと断

定することはできないが、三齋の寺にあったことから、三齋好みの茶碗の傾向を伺うことは許されると思う。即ち、上記二碗の類似性から見て、三齋は奥高麗茶碗かそれに似た茶碗が好みであったと類推できる。

茶人でもある三齋がわざわざ唐津から陶工を召し連れるとすれば、自分の好みの茶陶を焼く陶工を選び出して招致はすであるが、実際にはそうでなかったことになる。

井上氏は『上野焼研究』の釜の口窯跡の項で、「ここで注目しなくてはならぬことは、あれ程茶道に熱心で趣味の深かった細川三齋公の指導茶器とおぼしきものの存在せぬことである」(三七頁)と述べているからである。

三齋好みの茶人が文政七(一八二四)年の茶会記に出ている(同九一頁)から、三齋が上野焼に指導を加えているとみられるが、少なくとも釜ノ口窯時代には三齋の好みとは無縁のものが焼かれていた、というべきである。

即ち、三齋が本気で自分の好みの茶器を焼く陶工を探そうとしたならば、市の瀬高麗神、藤の川内、阿房谷、道園、壺屋の谷等に行けば奥高麗の茶器を焼く陶工にめぐり合うことができたのである(中里一一二頁)。そ

れにもかかわらず、釜ノ口窯から三斎好みの茶器が出ていないというのであるから、三斎は唐津に尊楷を探しに行くということはしなかったし、尊楷は唐津で作陶するということもしなかったとみるべきで、それは更に次のことよって保証される。

(4) 関ヶ原合戦直後の三斎の行動

米津三郎は『小倉藩の歴史ノート』で、三斎の行動と藩政の動向を詳細に述べている。三斎は慶長五(一六〇〇)年十二月丹後国宮津を出発して中津城に入り、小倉城には弟興元をおいた。中津城に入った三斎は翌六年四月、国中の検地を命じ、六月には自ら廻郡して検地の状況と領国の実情を視察している。検地は、家臣の知行割と藩財政、また農村整備のための基礎資料作成として、急がれる仕事であった。検地に先だつて十二カ条からなる法度や反別石盛りを定め、調査項目も多岐にわたっている。検地は七月に終了、八月には知行割を行い、三十万石を家中に、九万石余を藩用に充てている。

六年、三斎には黒田藩との外交折衝の件もあった。後任藩主の三斎に残しておくべき中津藩六郡の年貢米を長政が筑前に持つていったからである。年貢米返納要求に対して長政

は何の応答もせず、三斎は家康に訴えて自分の主張を認めさせたものの、長政はすぐ返納しなかった。やむなく三斎は関門海峡に大船を出して黒田藩の藩船の積荷を差し押さえる態勢をとった。

六年の仕事として、小倉城増改築の設計作業があった。領地が四十万石近くに拡大したので、六万石の毛利吉成時代のものでは狭すぎ、大規模な増改築と濠の掘削、それに伴う城下町の町割計画を急がねばならなかった。

六年のうちにはまた、大名になれず、兄三斎の家臣とされた弟興元の不満とその挙げ句の大坂への出奔事件があった。この年は心理的、外交的にも心労があったに相違いない。

七年一月十五日、築城の鋳入れを行い、十一月中旬に完了し、三斎は中津から小倉城に移った。城の規模は一重目の東西一五間、南北一三間、五重、天守疊数八九六畳、石垣の高さは九間半であった(『九州の諸藩』三二頁)黒田氏の福岡城が慶長六年から同十三年までかかつて完成したことを思えば、三斎がこの年小倉城の構築にいかに全力を傾けたがわかる。

以上の実情を念頭に置いて尊楷を唐津より招致の事を考察してみると、慶長五年招致は

物理的に不可能と云つてもよい。押し詰まつた年の瀬に、一族郎党、武器弾薬、家具、兵糧をようやく中津城等に入れた者が、藩行事と直接関係のない陶工探しに一国隔てた寺沢藩まで出かけることはまずあり得ないであろう。

すでに述べたような多忙な中で、陶工探しとは少し話が飛躍しすぎてはいないであろうか。三斎が旧知の帰化陶工源七を小倉に呼んだのは元和七(一六二二)年であった。

(5) 三斎が連行した又介

八代市立博物館発行の『八代史料集』によれば、三斎は陶工又介を得、豊前転封によって上野に召還したことになる。山鹿上野焼史料の寛に次の記載がある(三八六頁)。

一、私尊祖父又助与申者三斎様御代於丹後国被召抱御扶持方御〇〇被為拜領御焼

物師二被仰付数ヶ年相勤申候内三斎様御好之御道具御前二被召出御〇〇前御直々

度々被仰出御用相勤申候段々御恣意被仰付豊前二御供被仰付罷越豊前之内上野

(アガノ)と申所二被召置開畑等被為拜領上野二ても御焼物師被御仰付相勤其後

上野二て病死仕候
また、同館の『八代焼—伝統の技と美』の

一七一頁に、寛永五年三月十一日の記事

(21) 肥前へ、石薬取二被遣二付而、石薬見知申すたるもの可遣旨、被仰出二付、間井太郎

介二様子相尋候処二、前廉肥前にてやきもの仕たる唐人、上野二居申候、是を可被遣通、最前申上候、彼被遣唐人ハ少三郎親又介と申もの二、太郎介申合置候由、被申候、また、その翌日付のものに次のものがある。
(22) 一書申入候、上野皿山の又介と申唐人、御用二付、肥前へ遣申候間、被仰付、可被遣候、猶、此御鉄砲衆、口上二可申入候、恐々謹言

三月十二日 兵二 修り

河喜多五郎右衛門殿
釘本半右衛門殿

右の二史料によつて、三斎は肥前に居た唐人を丹後に連行しており、豊前転封に際して上野に伴っていたことがわかり、しかも肥前へ石薬取りに遣わすということもあつたのである。

ここで注意すべきことは、肥前—当時の窯場は唐津と総称されていたから、唐津に石薬を取りに行かせる者の名を又介だけあげてい

があるとするれば、この時、尊楷の名も出ていてよさそうであるが、その気配が全くない。

更に、同史料は又介の子少三郎の名を八回、又介二回、左右衛門尉・又三郎・甚兵衛・弥太夫各一回あげているが、尊楷・喜蔵の名は出ておらず唐津に居る尊楷を三斎が上野に招くという説は又介と尊楷を取り違えている感じさえして、尊楷の唐津から上野への過程はあり得ないように思われる。

四、上野焼の唐津焼に似ること

初期の上野焼が唐津焼によく似ていることは、諸家の共通して説くところである。いま、尊楷唐津に居らずとし、尊楷の故地を南鮮周津里とすれば、北鮮的な唐津焼風な焼物が釜ノ口窯から出るのどのような事情によるであろうか。これに正しく答えられなければ尊楷唐津に居らずの説も無に帰してしま

う。
永竹威は高取第一期の製品は極めて古唐津的であるという。即ち、宅間窯及び内ヶ磯窯の八蔵らは唐津焼的技法も使っていたことになる。従つて、次のような経路によつて、上野焼が唐津的側面をもつに至つたと考えられる。

(1) 上記のように、八蔵らが慶長元年から五年

にわたつて上野で製陶に従事していたこと。

(2) 寛永元年、領主忠之の怒りに触れ、内ヶ磯窯を廃した際、一部が釜ノ口窯にのがれ来窯した(8)。

即ち、高取窯の影響もあつたとみられるが、最も大きな影響は陶工又介の存在によるとみられる。

三斎が又介を得たと考えられる文禄二年後半は、ちょうど唐津岸岳城主波多親が秀吉によつて改易され、城下の飯胴壘下窯、同上窯や帆柱窯が兵火で廃窯となり、そこで働いていた陶工達は行き先に迷つていた頃に当たり、陶工の連行には絶好の機会であつたといえよう。

従つて、又介は陶芸にすぐれたものとして選択的に連行されたであろうから、釜ノ口窯が始まつて間もない時期に来た又介の技術的影響は大きいものがあつたといえよう。

五、片山丈士の指摘について

氏は『加藤清正』上巻に「上野家では、清正から貰つた短刀と祖先が清正から許されて焼いた桔梗の紋を家宝として伝え、屋敷の一隅に清正の祠をつくつて、代々祭りを続けて来た」と記し、短刀と祠の写真が載せてある(二九〇頁)。

氏は昭和三八年夏、高田の上野家を訪ね、清正の遺影や万治年間の母屋の御成りの間にも上がってそれらを見たといい(上巻二二七頁)。

氏はこの家を本家とし、日奈久の上野家を分家のように扱っているが、(同二二六頁)、日奈久の上野才助家の方が本家で、筆者が平成五年十二月三十一日、韓国古戦場巡りの帰りに上野才助宅を訪問してお話を伺い、案内いただいたとき、この本家には上述の祠、短刀、桔梗紋のどれ一つもなく、執拗な質問にも肯定的な答えはなかった。

このことについて八代市立博物館の福原透氏にお尋ねしたところ、これは中上野家(尊楷三男藤四郎の後裔)のことで、江戸時代の母屋は現存しているが、清正の遺影は見たことも聞いたこともない、桔梗紋は江戸後期の釘隠であつたらう、清正の短刀のことは知らないが祠はあると思うということであつた。

何れにしても、この本で語られていることは高田の上野家だけのことである。奥付によると、この著者は劇作や小説を書いておられるようで、この本は小説かと思つていたが、伝記に分類されているので、少し、客観的に考察を加えておくことにする。

感じていたことからみて、前領主吉成時代を語ることをはばかったためと考えられる。文禄元年、軍船によって渡来した尊楷は、名護屋の港ではなく唐津港に入ったのであろう。両港は近接しており、唐津港の方が小倉に近いからであり、そのことを尊楷は子供忠兵衛たちに語つたことがあるであろう。

多くの先学はこれらを基にして様々な史料を提供しながら諸説を展開してこられ、尊楷像を豊にすることができ、益する点が多い。しかし、史料の見方を変えたり、新史料が出ればそれらを統一的に解釈するため、従来とは違った説を立てなければならなくなる。これは学問の宿命であつて、これもまた許していただかなければならないと思う。

注

- ①毛利亮太郎 上野尊楷渡日考(歴史研究四四五号)
- ② 統上野尊楷渡日考(歴史研究四五〇号)
- ③ 統々上野焼研究(歴史研究四五六号)
- ④ 上野焼試論(一) (一一)
- ⑤ 陶説五五二号(五六四号)
- ⑥ 毛利吉成による尊楷の文禄元年渡来説

まず、短刀と桔梗紋使用の許可は何時どこで得たかを問題にしよう。八代市史は慶長三年十二月以来、清正との交渉は何も見えていないという(五四三頁)から、右の授受は清正との別離の時としなければならぬ。

それにしても、清正は自分に対して何の手柄もなく、自国肥後にも連行しない者に何の理由があつて短刀と家紋使用認可を与えたとするのであろうか。その時、清正は少なくとも井土新九郎と高田焼を尊楷に先んじて始めた陶工(弥太夫か)は肥後に伴つていたのである。別れの印に上の二件があつたとすれば、それ以前に何らかの交渉があつたはずであるが、確かなものは何もないのである。

その仁徳を慕つてというのであれば、何故肥後について行かなかつたのか。唐津から「さながら唯唯として三斎にしたがつて豊前に移り、そこで三斎に厚遇され、さらに肥後にまで伴われた尊楷が、三斎にでなく、冷遇した清正を祀り続けるとは奇妙というべきではあるまいか。豊前に三十年、肥後十四年計四十四年間の三斎の物心両面にわたる厚遇よりも、清正の短刀と桔梗紋使用許可の方が重要であつたのであるうか。

清正は肥後まで直接連行した井土新九郎は

(関一〇号)

⑩八頁

- ⑪貝原益軒『黒田家譜』二二三頁
- ⑫高取静山『高取家文書』一八三頁
- ⑬旧参謀本部『朝鮮役』二〇六頁
- ⑭相良徹夫『探訪日本の陶芸四高取上野』九頁
- ⑮李燭錫『壬辰戦乱史』中巻五三頁
- ⑯常石英明『朝鮮陶磁の鑑定と鑑賞』七七頁
- ⑰雄山閣『図解茶道事典』一一頁
- ⑱佐藤進三『上野古窯調査報告』九一頁
- ⑲赤池町『赤池町史』一〇八二頁
- ⑳永竹威『永満寺宅間窯跡』七〇頁
- ㉑片山丈士『加藤清正』上下
- ㉒中野嘉太郎『加藤清正伝』八〇四頁
- ㉓養田勝彦『加藤氏時代の八代焼きについて』
- ㉔井上円蔵『上野焼研究』一三二頁
- ㉕八代市教委『八代市史』五四三〜四頁

例会のご案内

近畿例会

次の日程で開催します。会場は京都市下京区の池坊短期大学です。

筑前の宅間窯に譲つたという。清正が陶工を優遇したとは考えられず、尊楷が三斎ではなく、清正を祀り続けるほど、清正に恩義を感じる理由は認められない。

金官は、文禄元年、王子捉えられるの時、打首にあうことなく生け捕られ、以来二十二年、清正の近習として仕え、二百石も与えられていたという実績があるが故に、清正を慕い、その死に殉じたのである。しかし、尊楷は清正から実質的な厚遇は何等受けておらず、清正を祀るほどのことをする理由はない。この話が、高田焼を始めた陶工(弥太夫か)と加藤右馬允(あるいは清正)との間のことであれば理解できるが、尊楷と清正の話であれば、客観的に在った話とすることにためらいを感じ、清正説の一資料と認めることはできない。

おわりに

尊楷唐津に居るの説の最古のものは『上野家文書』五である。これは延宝五(一六七七)年二代忠兵衛の記したものの写しである。

これには上野を阿賀野と書くほど、上野時代が昔のことになった頃に書かれたものであるが、三斎が死去した時、尊楷は髪を切つて入道仕つたというほど、三斎の厚遇に恩義を

○四月二日(土)午後二時〜四時

茶の湯資料としての『兼見卿記』

報告者 谷端昭夫氏・雨宮六途子氏・日向進氏

東海例会

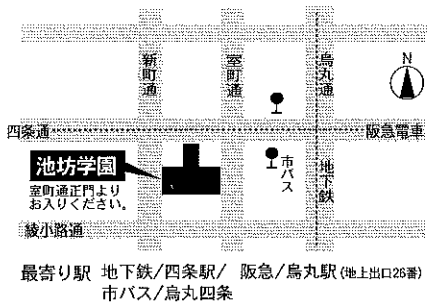
第五回例会を、次の日程で開催します。会場は名古屋市中区にある名古屋女子文化短期大学アセンブリーホールです。多数のご来場をお待ちしています。

○四月二日(金)午後六時〜八時三〇分

茶の化学成分とその薬効 山中直樹氏

京の名水―茶の湯の水ということ 堀内國彦氏

近畿例会々場 (池坊短期大学)



池坊短期大学・池坊文化学院

〒660-8491 京都市下京区四條室町鶴鈴町 ☎0120-87-3852

後記

※前号毛利亮太郎さんの文の内、次の箇所を訂正します。

二頁上段十二行目「陶工」↓「陶土」

二頁上段二十四行目「窯ノ口」↓「釜ノ口」

二頁中段十五行目「陶工」↓「陶土」

二頁中段二十五行目「例」↓「側」

申し訳ありませんでした。

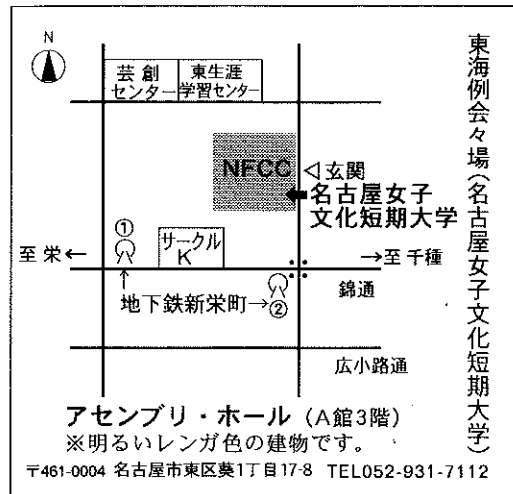
※寒さの厳しかった冬もやっと終わろうとしています。厳しい寒さの次には美しい春を待ちたいところです。この会報も今年度の最終号で、年度内に何とか四度発行できました。今年度は投稿原稿もあり、役員の方々の協力もあり、原稿集めに苦労することが少なく有り難かったのですが、例会の報告が十分でなかった点は反省しています。

※未掲載の投稿がまだ幾つか残っています。筆者の方々には御迷惑をおかけしますが、今しばらくお待ちください。

※九月開催の研究会については、高橋副会長の報告を掲載しましたが、研究発表の概要については次号に掲載する予定です。一月静岡で開催した研究会の発表の概要も次号に掲載します。

※今年度の総会・大会の開催日時については、来年度の理事会で決定しますが、五月三十一日・六月一日の両日今年度と同じく京都の池坊短期大学で開催する予定です。準備を進めています。発表について、ふるってご応募ください。

※この会も会員の伸び悩み状態が続いています。会の活動を広げるためには財政の安定が必要です。会員の増加にお力添えをいただきたく思います。



当会のホームページのアドレスが変わりました。最新の情報を提供しますので、ご利用ください。

<http://chanoyu.hoops.ne.jp/>



<http://www.chanoyu-gakkai.jp>